有田泰而「First Born」開催記念

ギャラリートーク

「大切な写真」上田義彦

ー 師、有田泰而の「First Born」を語る ー

左：木本禎一氏　右：上田義彦氏

2024 年 5 月 25 日（土）15:00 ～ 16:00、フジフイルム スクエア 写真歴史博物館内にて、本展企画者でプリントを制作された写真家の上田義彦氏によるギャラリートークを開催した記録をお伝えします。

聞き手・文章化　木本禎一（テンポラリー・コンテンポラリー）

FUJIFILM SQUARE

「First Born」との出会い

木本禎一（以下、木本）

まず、「First Born」との出会いについてお聞かせください。上田さんが学生の頃ですよね。

上田義彦（以下、上田）

そうですね、大阪写真専門学校（現、大阪ビジュアルアーツ・アカデミー）に通っていた頃です。

僕の恩師は写真家の中川貴司（たかし）さんという方だったんですが、本当に学生の初期の頃ですけれども、彼からことあるごとに『カメラ毎日』に連載されていた写真を見せてもらっていたんです。

中川さんは「この写真いいだろう、どうだ？」とぼくに問いかけるように、言葉を投げかけるんですが、「First Born」もそのひとつとして知ることになりました。

木本

1973 年から 74 年に『カメラ毎日』に連載された「First Born」は、山岸章二さん（編集者）が編集なさった…

上田

そう、有田さんが山岸さんに見い出されて、1 回目の掲載となった。それが面白いということで、その後、連載に繋がったのではないかと想像します。

木本

それで最初の掲載時にはタイトルに番号が振られていなかったんですが、つまり「First Born 1」がなくて、2 回目から「First Born 2」となり「First Born 3」となった。そして以降、1 号につき 3 から 5 ページぐらいのボリュームで、途中、休載はありますが全部で 13 回の連載となりました。

上田さん、お話を戻しますが、それで中川さんから「First Born」を見せられて、その印象がすごく強かったわけですね？

上田

そうです。中川貴司さんは、いろいろな写真を僕に教えてくれました。

アーヴィング・ペン、リチャード・アヴェドン、有田泰而、石元泰博、エドワード・ウェストンとか、彼の気になる写真家の作品をことあるごとに見せてくれて、そのたびに僕は驚き、写真って面白いなと素直に思ったんです。

なかでもとくに有田さんの写真は、相当に僕に影響を与えたと思います。それはもう後々まで。

有田スタジオへの入所

木本

有田スタジオに入所したのは、81 年ですか？

上田

年代まではちょっと覚えていないんですが、僕は有田さんに無理やり助手にしてもらったような感じですね。有田さんのところへは、何度も写真を持っていって「見てほしい」というようなことを繰り返していまして、そのうちに「（有田スタジオに）入るか？」と言ってもらいました。

それでほぼ毎日のように「First Born」のプリントを見ていたんです。スタジオの棚というか、ロッカーに大事にしまわれていたプリントを暇があると取り出して…。

助手の経験自体はじつはそんなに長くはないんです。福田匡伸（まさのぶ）さんのところに 1 年、有田さんのところに 1 年。

木本

その頃に、有田さんから奥さんのジェシカさんとのなれそめを聞く機会があったんですよね…。

上田

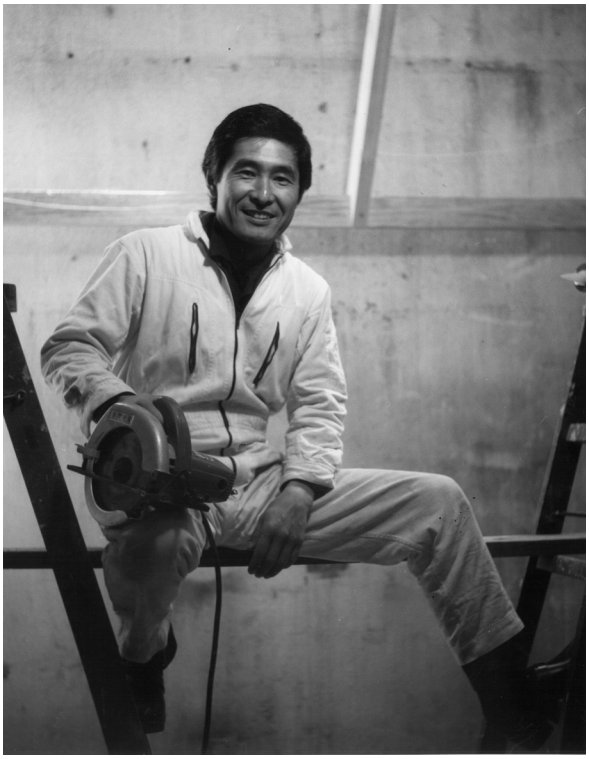
なぜ、そんな話になったのかはちょっと覚えてはいませんが、たぶん暇な時だったと思います。有田さんがジェシカさんと出会った日のことを僕に教えてくれました。

その時僕が聞きながら勝手に想像した風景は、外にはこう、通路があってそこにドアがいくつか並んでいるような、よくある 2 階建ての昔ながらのアパートですね。

有田さんはドアを開けっぱなしにしてレコードをかけていたんだそうです。

僕の勝手な想像では、たぶん大好きなビートルズだったんだろうと思いますが、それで、ジェシカさんが開いているドアから中を覗き込んで「一緒に聞かせてくれない？」と訊ねた。

それがふたりの出会いだったそうです。



有田 泰而氏（撮影：沼田 早苗氏）

木本

とても素敵ですね。

「First Born」とのつながり

木本

ところで、先ほど「First Born」を最初にご覧になって強く印象に残り、その後にわたりすごく影響を受けられたと仰っていましたが、それは、どういったところでしょう？

上田

初めて見た時から今まで、「First Born」に対する印象は少しも変わりません。

とても素直に奥さんと子どもを撮っているじゃないですか。

簡単に言うと、僕も結婚したら必ず撮りたいなと思うようになりました。家族写真というものを。「日常」を。「日常」というのは、目の前にある家族が暮らす時間ですね、「First Born」には日常のとても「大切な時間」が写っている。それが楽しく…今でもそう思います。

ぼくが見たことのある写真家では、有田泰而でしかそういう経験をしたことがないです。そういう写真ですね。有田さんは、ジェシカさんと写真で遊んでいたんだと思うんです。 とても楽しく。遊んでいてふたりを繋いでいる写真。

ふたりで生きていくこと、それを楽しく撮っているっていうんですかね…幸せな、とても幸福な写真に見えたんです。

木本

有田さんは、1977 年、一度はジェシカさんの故郷カナダに移住されますが、80 年に単身日本に戻ってこられた。

この帰国がなければ、翌 81 年に上田さんが有田スタジオに入ることもなかったのかと思うと、運命の交差のようなものを感じます。

その後ジェシカさんとの別離を経て、有田さんは新たに奥さんとなる雅子さんと出会い、1991 年から拠点をアメリカに移し、森のなかで暮らしました。

お亡くなりになったのは 2011 年の 7 月。亡き夫を想う雅子さんと文筆家の清野恵里子さんがメールで交わされたやりとりは、『往復書簡 カメオのピアスと桜えび』（集英社）として刊行されています。この本の 2012 年 2 月のやりとりに「上田さん」のお名前が登場します。

当時上田さんは Gallery 916 というご自身のギャラリーを運営されていて、そのときちょうど開催していた「Materia」という屋久島の森の写真展に清野さんがいらして上田さんとお会いになったんですよね。それで、有田さんのお話が出た。

上田

そうです。有田さんが亡くなったことは既に知人から聞かされていたのですが、このとき僕の気がかりを清野さんに打ち明けました。

有田泰而が亡くなってしまったら、あの「First Born」は一体どうなってしまうんだろうか？それがとても気がかりだったんです。

有田さんは写真家から画家に転身されて、そのままアメリカに行き絵を描くことに専念されていた。だから、写真集を出すことは難しいだろうなとは想像していました。それで亡くなられた

と聞いたとき、僕が一番大好きな、とても大切な「First Born」が一体どうなってしまうんだろうと思ったんです。

アメリカに移住してしまっていましたから、手の出しようもない。

けれどもし…もしできるのならば、代わりに自分が写真集を出せないかと考えていましたね。そんな話も清野さんにしたような気がします。

その後、雅子さんと連絡を取り合うようになり、彼女も写真展や写真集が実現できないか模索していたと知りました。

森で暮らす雅子さんは、写真をどう保管すればいいのか悩んでいました。森の中に暮らしていて、湿気など写真の保管についても不安があったかのかもしれません。それで僕のもとに大切なネガを預けてみようと思われたんだと思います。

上田義彦氏

プリントの経緯

木本

モノクロもカラーも全てのネガを、改めてプリントした経緯についてお話いただけますか？

上田

雅子さんがわかる限りの写真を、箱に詰めてアメリカから送ってもらいました。でもそれは僕がもともと知っているもの、つまり先ほどお話した、スタジオで毎日見ていたプリントではなかったんです。

黒い革の装丁で、ロッカーに大事にしまわれていた「First Born」は箱の中に見当たらなかった。

それでネガをひとつひとつ調べていくと、僕の知っている写真は確かにありました。ネガとしてあるならば、これはもう僕の手でプリントするしかない。

助手の頃、有田さんと暗室に入ることがよくありました。僕自身は暗室が大好きで。現像液の動かし方なんかを「これは石元泰博さんから教わったんだよ」とか有田さんが言うたび、いちいち驚きながら、喜びながら、教わりました。

雑誌から「First Born」の掲載依頼があると、簡単なプリントは僕がすることもありました。だから目に焼き付いている。それで「自分にはできる」と思っていたんです、プリントワークを。

それは「ネガさえあれば有田さんと同じプリントができる」ということではなく、「自分にはうまく伝えられるようなプリントができる」ということです。

それで、ネガから僕の知っている写真を探しだして、ほぼ毎日、仕事の手が空いているときには有田さんのプリントをしていた時期がありました。

この会場で配布しているパンフレットには「2 か月」と書いていますけど、実際はもっとかかったような気がしますね。

そしてほぼ全ての写真を覚えていると思っていたのですが、ネガをめくりながら「あれ、この写真は見たことがないぞ」ということもありました。

有田さんは焼いてはいないんだけれども、これはすごい写真だなっていうのもいくつかあった。

それを僕が勝手にプリントしました。

*01

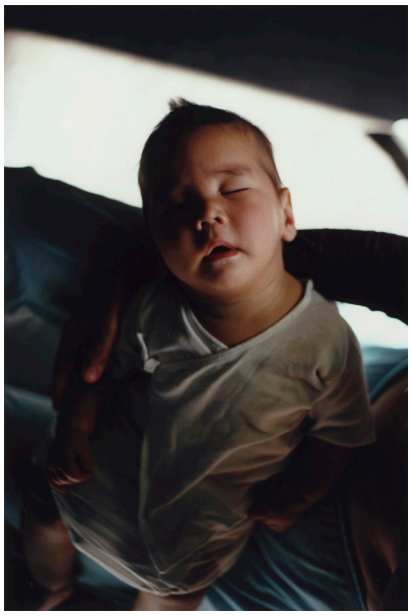
カラーの写真が多いんですけど、（展示を示して）一番下の真ん中にあるそのカラーの写真 *01 ですね、ジェシカさんが息子のコーエンくんを、コーエンくんっていうんですけど、窓の外から覗いている一枚。

あとは（展示を示して）彼が寝ている写真 *02 ですね、基本的には有田さんの選んだものでほぼ構成しているんですけどね。

これはどうしても大事な写真だなと思って。

それからもうひとつ、（展示を示して）この写真 *03 も。これも有田さんは焼いていないのですが、大切な写真だと思います。

たぶんパスポートのために撮ったものですが、よく見ると素晴らしい写真で。なんというか、ふたりの関係が、視線が、ジェシカさんのカメラを見る目がとても素晴らしいなと。



*02

*03

「大切な写真」

木本

「大切な写真」というのは、つまり「選択された写真」ですよね。写真家はシャッターを切るとき、フレーミングで撮るものを選択している。そうやって世界を切り取っている。そしてコンタクトシートに起こして、どれをプリントするか、どれを展示するのかさらに選択を重ねる。

この展示もそうですよね。だとすると、上田さんにとって選択に値する「大切な写真」とはどういうものでしょうか？

上田

いろんな意味があると思いますが、写真って僕は「奇蹟」だと、「奇蹟」が写っているんだと思っています。すべての写真がそうとも言い切れないんだけれども。

とても純粋に“この人を撮りたい”と思って撮った写真、「何々のように撮ろう」なんて目論みはなく、純粋にカメラでその人を撮り、写そうとした写真は、ほぼ「奇蹟」だと僕は思います。

場所であったり、時間であったり、その人との関係であったり、さまざまなことが重なって、カメラの前に立っている人を撮っているということ。

その時が「奇蹟」なんだという風に思って撮っている人はなかなかいないと思いますが、のちのち考えると、そこに二度と撮ることができない写真が写っている。

そういう意味で「大切な写真」だと思うんです。

木本

「暗室」というプロセスについてはどう思われますか？撮影した写真との「再会」と言い換えてもいいかもしれません。

写真集や展覧会をつくりあげていく上で、この「暗室」での出来事が、上田さんにとって重要な意味を持っている気がしました。

上田

（展示を示して）左から 1、2、3…5 番目、チラシのヴィジュアルに使われている写真 *04 ですけれども、この写真が僕は一番好きです。

この写真が、現像液のなかから浮かび上がってきたとき、大袈裟ではなくて、泣いてしまいました。自分にとって、僕が写真をこんなに続けてこられたのは、この写真と出会ったからじゃないかなと、そう思えるほど…。

今日も、外にポスターが貼ってあったので写真を撮りました。現像液から浮かび上がったとき、僕と写真の複雑な関係というか、純粋な写真に対しての想い、そんなものを一気に思い出させてくれて、いや思い出すというよりも、またそれが湧き上がってくるという経験をしました。

*04 First Born 3 July,1973

「選択」と「再会」

木本

今回は、もうひとつ別の「選択」と「再会」もありましたよね。

上田さんがプリントした「First Born」が Gallery 916 で初めて発表され、写真集になったのが 2012 年。本展はそれから 12 年弱ですけれども、この展示スペースにあわせて作品数をぐっと絞る必要がありました。

久しぶりに会ったプリント、すでに選択がなされた写真からさらなるセレクションを行う上で、どんなことを思われましたか。

上田

いまここに展示しているのは、なんていうのかな、やはり「First Born」の一部だと思います。

いい意味で厳選されていて、どれも僕がとても大好きな写真です。そして、ここに何が写っているのかと言えば、やはりふたりの本当に大切な日常であり、心から純粋に写真というものを楽しんで撮っていたんだなと思います。

僕は 22 歳か 21 歳、そんな歳の頃に初めて「First Born」を見たわけですが、今も全く同じように見ることができます。

見るたびに新しい発見があるということではなく、この写真の前に立つと、ヴィヴィッドな感覚が蘇ってくる。そういう意味で本当に新鮮な写真なんですね。

古びないっていうのが一番。こんなに古びないんだということにますます驚いていますね。ここには写真の大切なものが写っている。それを僕は「奇蹟」と呼んでいるのかもしれないです。

目の前でもう二度と起こらないことがとても新鮮なものになり、僕らも新鮮に見ることができるんだと思うんです。

左：上田義彦氏　右：木本禎一氏

展示作品について

木本

展示作品についても少しお話を伺いたいです。

まず僕の方から簡単に説明しますと、一番右端の写真は 1969 年に撮られたものです。続く 2 枚はジェシカが妊娠されているときで、「ジェスと能登の旅」として 1972 年に『カメラ毎日』に掲載されました。この新婚の時期を経て、コーエンが加わり新たな遊びが展開される。

本展の副題は「家族と遊ぶ時間（とき）」で、このトークの中で何度も「遊ぶ」という言葉が出てきましたが、後半にかけては明らかにトーンが変わっています。

皆さんもお気付きになったかもしれませんが、「遊ぶ」というよりもどこか寂しさが漂う写真です。まるで有田とジェシカの別れを予感しているような…。

上田

僕はそのあたりの実際のことは詳しく知りません。

だから本当に写真から読んでいくというか、焼きながら感じていったんです。

それで、展示順は時系列にした方がいいんではないかなと思いました。

ですから、赤の他人である僕が有田さんの写真から感じたことで作りあげたのがこの展示なんです。彼が本当に寂しかったかどうかはわからないのですが、僕が助手をしていたときの彼の様子から、はたとそう思うことはありました。

有田さんはね、コーエンのためにプラモデルを作ってはカナダに送っていたんです。リモコン式のプラモデルをね。それを、こう、床の上で動かしている姿を見て「作らないでそのまま送ってあげた方がいいのに」なんて心のなかで呟いたりしながら、僕は彼の寂しさを思いました。

でもそれは、まったく勝手な想像です。ただ、そんなちょっとした経験をした人間である僕が、自分の感じたことから、順番をこうした方がいいんじゃないかなと新たに考えたのが今回の展示なんです。

木本

ありがとうございました。

質疑応答

木本

それではここで質疑応答に移りたいと思います。どなたかいらっしゃいますか？

ご参加者

有田さんは、アメリカに移られた後は写真よりも絵を中心に創作なさっていたのでしょうか。アメリカに行った後、亡くなられるまでの活動についてお聞きしたいです。

上田

いや、僕もまったく存知あげなくて。

アメリカに渡る数年前に日本で「稈者の森」っていう展覧会を開催して、そのあたりからほぼ絵の方に気持ちを置いていたと思います。

ただ、アメリカで画家としてどう暮らしていたのかは詳しく知らないです。

ご参加者

今回のリプリントに関して質問です。

上田さんは、助手であった当時に有田さんのプリントをご覧になっていたということなんですけど、今回、ネガから改めて焼き付けるに際して、上田さんならではのトーンというか、上田さんの解釈というものはどのぐらい入れてプリントされたんでしょうか？

上田

解釈は入っているかもしれませんけれども、僕のトーンとかは一切考えたこともないし、あくまでも有田さんの写真を焼いたつもりでいるんですね。

有田さんは石元泰博さんからモノクロを学び、それを僕に教えてくれました。ですから僕は、彼らと同じ現像液、同じ印画紙を使ってプリントしています。

いかに印画紙に触らないで、バットのなかの現像液を揺らして紙を動かすか、そういう、とても大事なことを教わりました。自分の写真はそこから出発していて、当時も今も、プリントの仕方は変わっていません。

自分のトーンというものについては、ある時までは気にしていましたが、今はほぼ考えないようにしています。手法についてもそうです。

ただ、欲求って言うんですかね。こうあるべきだとか、こうしたいっていう思いはたくさんあるから、自分を出さないようにしてプリントしたかといえば、そういうことでもないのですが、それはつまり僕には有田泰而さんの「First Born」はこうだという素直な思いを込めたのであって、そこから遠い写真は焼いていないし、ちゃんと焼けたと思っています。

木本

いま上田さんのお話に上がった石元泰博さんは日本を代表する写真家のひとりで、日本綜合写真専門学校で学ばれた有田さんの恩師にあたり、「生涯先生と呼べるのは石元さんだけだ」とおっしゃっていたそうです。

その石元さんが亡くなられたのは 2012 年 2 月 6 日。先ほど、有田雅子さんと清野恵里子さんのご本に上田さんの名前が出てくるとお話しましたが、その日付が 2012 年 2 月 7 日です。余談ですが、何やらご縁のようなものを感じるとこのトークの前に上田さんと話しておりました。

フジフイルム スクエア

みなさま、ありがとうございました。今お話がありました日本の写真史に残る写真家 101 人の「フジフイルム・フォトコレクション」収蔵作品の中に、石元泰博さん（「シカゴ 子供 1958-61 年」）、有田泰而さん（「First Born 1973 年」）、上田義彦さん（「Robert Mapplethorpe 1986 年」）、このお三方の作品が収蔵されています。

会場には上田さんがプリントを焼かれた時に参考にされた有田泰而の「First Born」構想ノートをお借りして展示しております。貴重なものですので、ぜひこの機会にご覧ください。

最後に

木本

最後に上田さんからひと言いただけますか。

上田

有田さんご本人は『First Born』の写真集を自分の手で作りたかったんじゃないかと思うんです。だから有田さんに会うたびに僕は「写真集はまだ作らないんですか」と言っていたのですが、いつも「いや、俺は作るんだよ」と言っていたんですよね。有田さんご本人は『First Born』の写真集を自分の手で作りたかったんじゃないかと思うんです。きっと作りたかったはずです。

しかし、その前に亡くなってしまったから誰よりそれを待ち望んでいた僕が、結果として「First Born」を作ることになりました。僕は、常々有田さんはもっと多くの方に知っていただきたい、大切な写真家だと考えていました。

今や有田泰而という写真家を覚えている人は少ないのかもしれませんから、今回の写真展が、より多くの方に有田泰而を新たに知っていただく機会になればと思っています。

木本

今日はありがとうございました。

FUJIFILM SQUARE

First Born 3 July,1973

フジフイルム スクエア 写真歴史博物館 企画写真展

有田泰而（ありたたいじ）「First Born」— 家族と遊ぶ時間（とき） —

会場	FUJIFILM SQUARE（フジフイルム スクエア） 写真歴史博物館
会期	2024 年 5 月 23 日（木）～ 8 月 28 日（水） （最終日は 16:00 まで）
主催	富士フイルム株式会社
企画協力	有田雅子
企画	上田義彦／テンポラリー・コンテンポラリー